

2016年度「日本・アジア文化と人間」プロジェクト研究報告

2016Annual Report

‘Japan and the Asia culture, and a human being’ Research Project

椋山女学園大学文化情報学部教授

飯塚 恵理人

Erilo Iizuka

「日本・アジア文化と人間」プロジェクトでは昨年度に引き続き、構成員がそれぞれメインテーマである「日本・アジア文化と人間」を踏まえ、各自の研究を継続遂行した。

梅野きみ子

前年度からの継続の下記2つの研究課題に取り組んだ。

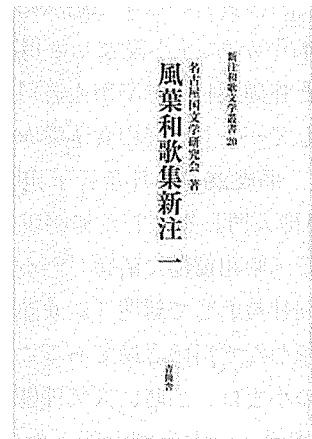
1) 名古屋国文学研究会

所属する会員（名古屋・関西方面からの女性研究者20名ほど）が、4月2日（土）、5月7日（土）、6月18日（土）、7月2日（土）、8月6日（土）、9月3日（土）、10月1日（土）、11月5日（土）、12月3日（土）、1月21日（土）、2月4日（土）、3月4日（土）、3月25日（土）のそれぞれ午後1時～6時まで、椋山人間交流会館G階会議室において、『風葉和歌集』の注釈研究のための発表会を開催した。その成果は、平成28年5月25日発行の『新注和歌文学叢書』（青簡舎）の中に『新注和歌文学叢書 20 名古屋国文学研究会著 風葉和歌集新注 一』として刊行された（写真画像参照）。

引き続いて、『同 新注 二』を刊行するために、これまでの発表会の原稿をまとめながら、さらに、続きの18号以降の部分の研

究発表会を開催した。

なお、これまでに発行した『風葉和歌集研究報』1～18号は、その叢書の体裁に合わせた原稿に、修正・書き換えて編集している。



2) 『源氏物語』の注釈研究会

本研究会では、風間書房からの共著『源氏物語注釈 十一（浮舟—夢浮橋）』を刊行するための打ち合わせを、共著者6名のうち5名までが、名古屋国文学研究会のメンバーである関係から、上記の名古屋国文学研究会の開催された日に、椋山人間交流会館G階会議室において、編集方針などの討議をした。『源氏物語注釈 十一』（浮舟—夢浮橋）の出版は、平成28年10月刊行予定であったが、平成29年6月頃刊行を目指すことにして延期

した。その理由は、次の『源氏物語注釈 十二 索引』をCD-R版にして、『源氏物語注釈 十一（浮舟—夢浮橋）』に挟んで、同時出版した方が、時代の趨勢にかなった著作になろうということになったからである。原稿執筆のための、編集方針の打ち合わせは、2月4日名古屋国文学研究会の開催される日に合わせて、その開催の前に、交流会館G階会議室において継続して開催した。

富田和子

平成28年度は前年度に引き続き、18世紀以降、近世後期以降の俳諧資料の収集と整理を中心に、当該資料の収集と整理に努めた。この成果の中から、「小説家 中川雨之助の狂俳研究と狂俳観——柳亭雨人著『狂俳入門』を端緒として——」（『椋山女学園大学研究論集』48号 平成29年3月発行予定）をまとめた。『狂俳入門』を著した柳亭雨人は、名古屋で大正・昭和前期に活躍した小説家で、新愛知新聞社員として新聞「新愛知」に連載小説を執筆した中川雨之助であることが判明した。その小説は、当時、人気俳優の片岡千恵蔵や嵐寛寿郎、大友柳太郎らの主演で17本も映画化されるほど評判のよいものであった。しかし、地方の小説家であるためか、辞典に取り上げられることなく、ほとんど知られていない。そこで、雨之助の略歴と狂俳の研究方法を確認し、彼の狂俳観について考察したものである。

他に、東海近世文学会10月例会で、研究

発表「尾張俳人の系譜——『愛知古今俳人百家撰』を端緒にして——」を行った。小寺玉晃編『愛知古今俳人百家撰』は、也有を筆頭に、暁台の門人を中心にして、古今の尾張俳人102名を描いた絵俳書である。この中に狂俳撰者としても活躍した千里亭芝石や梅巢舎巴水らがおり、芝石は「大_ニ俳諧狂俳繁盛_{シテ}高名ノ耆人也」と評された。そこで、尾張俳人の系譜について考察したものである。更に資料を蒐集し、論文にまとめたいと考えている。

飯塚恵理人

飯塚は昨年度に引き続き、所属する「メディアと古典芸能研究会」との共同でラジオ放送開始期からテレビ放送開始後の民間放送の放送関係資料や放送局附属劇団の関係資料の収集・整理およびアーカイブ化を行った。

プロジェクト研究費と平成28年度科学研究費助成基盤研究(C)「東海地域近世・近代能楽資料の収集・整理とアーカイブ化」(研究代表者: 飯塚恵理人、課題番号: 26370216)による成果のうち、民間放送関係資料の成果については「名古屋芸能文化」26号に村上正樹氏との共著で論文「『名古屋芸能文化としてのテレビ局草創期ドラマ制作』の基礎的研究～中部日本放送草創期のテレビドラマ『演出家・伊藤松朗』の仕事～」を掲載した。また東海地域の古典芸能については本誌「椋山人間学研究」に「戦後東海地域古典芸能資料の紹介—写真から伺える能楽・筆曲愛好者の実際—」としてまとめた。

戦後東海地域古典芸能資料の紹介

—写真から伺える能楽・箏曲愛好者の実際—

Pictures of Japanese classic performing arts (Noh performance and playing the Koto) devotees in Tokai area

椋山女学園大学文化情報学部教授
飯塚 恵理人
Erito Iizuka

はじめに

戦後から昭和40年代までの東海地域における古典芸能の稽古においては、ラジオ・テレビの影響により東京の家元やその元で修行した地方のプロに習う人が増えたため、どのジャンルでも謡い方や演奏法、舞ならばその所作や演出などに見られた地方独自性が薄れて、「東京風」への流儀内の統一が進んだ。また能楽や箏曲では、戦前までの大家族制度や封建制度が支えていた旦那衆やその子女の家族ぐるみでの稽古に対して、戦後は核家族化・一億総中流化の流れの中で主婦一人のお稽古や男性の職場の余暇活動サークルでの稽古が盛んになった。昭和時代を通じて愛好者は師匠が同じ者がゆるい繋がり的小サークルを作り、その中で個々に教授を受ける小口になっていく。彼ら「小口」の愛好者は、能楽では能を舞うことを目標とせず舞囃子や仕舞を楽しんだ。また箏曲では戦前、自宅の商家や寺院の座敷で少人数の演奏会を催していたのが、戦後は社寺、さらに旅館や料理屋の座敷での発表会を行うようになった。また複数人数での合奏曲が増え、昭和40年代には能楽・箏曲とも公民館や市民会館などを稽古の場や発表会に用いるようになった。なお昭和時代末期まではまだ能楽でも箏曲・長唄でも

愛好者の大半は稽古をしている人で、プロの公演は「師匠の模範演奏を勉強する」目的で見に行っていた。しかし平成に入ると稽古をせず、最良のプロの公演に行き舞台や演奏を楽しむ「純粋な鑑賞者」というファンが登場し、能楽の公演では現在稽古していない人が過半数を占めている。

こうした趣味と階級との結びつきが薄れ、一億総中流化が進んだ戦後から昭和の高度経済成長期までの東海地域の古典芸能界の実態をよく語る資料として、「中津川謡曲連盟」初代会長岩田豊治氏が三重県四日市市に疎開で来ていた観世流能楽師塚田秀雄師を招いて中津川で開いていた社中（稽古サークル）会の写真と、戦後の名古屋の箏曲の「国風音楽会」の横井みつゑ師社中の写真を寄託して頂いたのでここに紹介する。能楽も箏曲も、個人で「稽古を楽しむ」愛好者が支えていた戦後から昭和末期の東海地域の能楽界・箏曲界の「実態」をよく反映している貴重な写真と考えている。

一 中津川謡曲連盟の写真（写真1～4）

戦前までの中津町（現岐阜県中津川市）での謡曲の稽古は、「中津宝生会」（注）の名で間孔太郎氏・菅井大作氏という素封家の支援

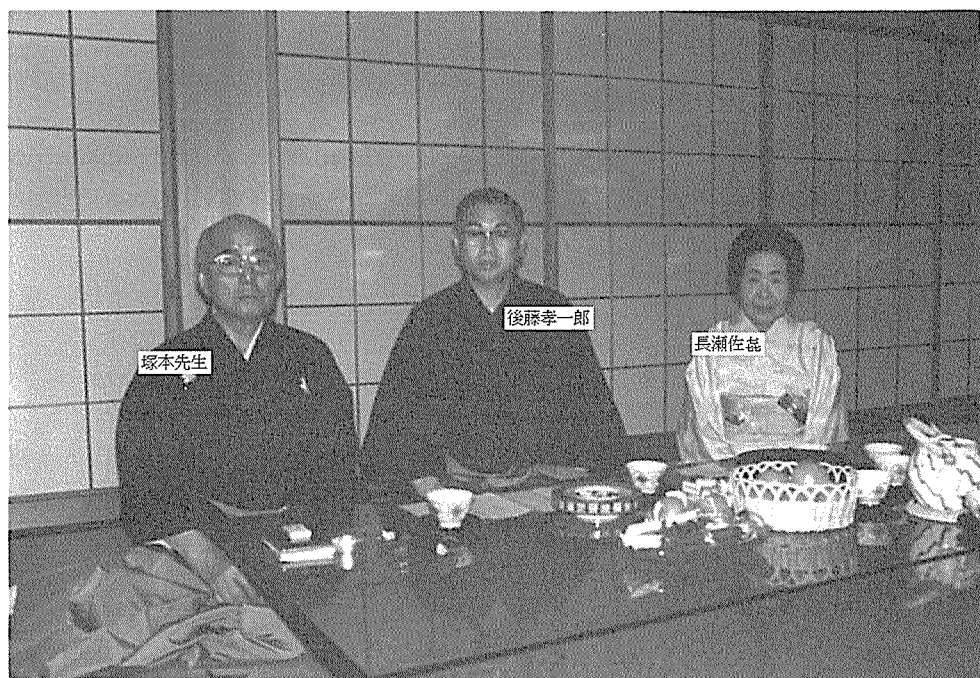


写真1 塚本秀雄師・後藤孝一郎師・長瀬佐喜氏

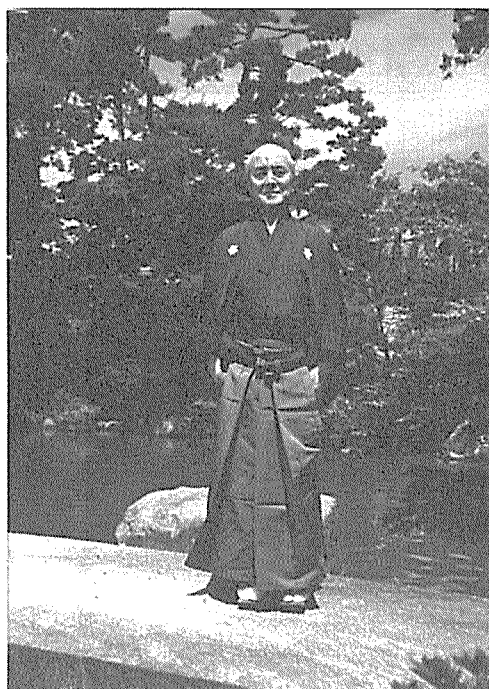


写真2 「すや」庭での塚本秀雄師



写真3 「塚本先生名残り惜しみの会」 昭和56年11月21日



写真4 昭和50年代の塚本師社中温習会記念写真

の下に松本長師・高橋徳之師という東京の宝生流の能楽師の出張指導を受け、地元師範の塚本忠治師・露子師を月並会の師範として招いていた。

戦後、中津川市の歯科医岩田豊治氏は観世九臈会の塚本秀雄師を招き、彼が中津川で素人に謡曲指導をする場所を提供した。その後、複数の能楽師が中津川に稽古場を作ったので、岩田氏が主唱者となりそれらの社中会を合わせて中津川謡曲連盟が結成された。なお岩田氏は戦前、親戚の竹内氏から養子として入ったが、その頃は中津宝生会に所属していた。岩田氏は東京在住の能楽師では観世元昭師を最良にされており、元昭師を招聘して中津川市で能を催したこともあった。

中津川謡曲連盟は戦前の中津宝生会と比較して女性の比率が多かった。それが関係するかは不明だが小鼓を稽古する会員が多く、岐阜市在住の幸清流小鼓方後藤孝一郎師が戦後独立後すぐに岩田氏の招きで中津川に出稽古に行かれ、現在も「中津川桂会」の指導をされている。そのせいか戦前の中津宝生会では温習会（稽古のおさらいを目的とする発表会）の演目に素謡が多かったのに対して、中津川謡曲連盟では仕舞・舞囃子が多かった。普段の稽古には岩田氏の自宅広間が開放されていたが、発表会は中津公民館や割烹旅館「長多喜」（現在も中津川市駒場桃山にある）の大広間などで行われた。

写真1は昭和40年代の中津公民館でのスナップ写真で塚本秀雄師、後藤孝一郎師と塚本師社中の長瀬佐喜氏が写っている。塚本師の社中では後藤孝一郎師について小鼓も一緒に稽古する人が多かった。

写真2は塚本師晩年の発表会のスナップ写

真で、菓子屋「すや」の庭園の池のほとりで写されたものである。

写真3は「塚本先生名残り惜しみの会 昭和56年11月21日」のタイトルが付いており、塚本秀雄師が中津川の稽古場を閉じる際の記念として催された会の写真と考えられる。

写真4は昭和50年代の塚本師社中の温習会の集合写真で女性が多いことが分かる。

塚本氏が稽古場を閉じられた後の中津川には観世九臈会の佐々木勝輝師が稽古場を作られ、現在では観世九臈会の中所宜夫師が稽古場を持たれている。中所師以外にも複数の観世流の能楽師の方が中津川で稽古場を開いておられ、毎年秋に中津川中央公民館で行われる中津川謡曲連盟の謡曲会はこれらの社中の合同で催されている。

二 戦後名古屋の箏曲写真（写真5～8）

横井みつゑ師は戦中から戦後にかけて名古屋の国風音楽会に所属し、多くの弟子を育てた箏曲演奏家である。横井師は津島に在住していた神戸すゑ（1887-1955）師の門人であり、同じ神戸師の弟子に佐藤君子師がいる。

戦後の箏曲界は能楽と同様に専業主婦など女性の愛好家が多くなった。それに伴い弟子として修行して師匠となっていく女性が多かった。特に国風音楽会は、トップは盲人の男性演奏家だが素人弟子の育成は戦前から多くの女性演奏家が行っており、その素人の女性演奏家から戦後、プロの箏曲演奏家や箏曲師匠が育っていった。

写真5は昭和26年4月15日の温習会集合記念写真である。森山千代子師の社中会と思われるが、弟子は若い女性が圧倒的である。森山師は今回貴重な写真を御提供頂いた古市



写真5 昭和26年4月15日の温習会記念写真



写真6 「娘道成寺」演奏風景



写真7 子ども演奏（森山社中温習会）

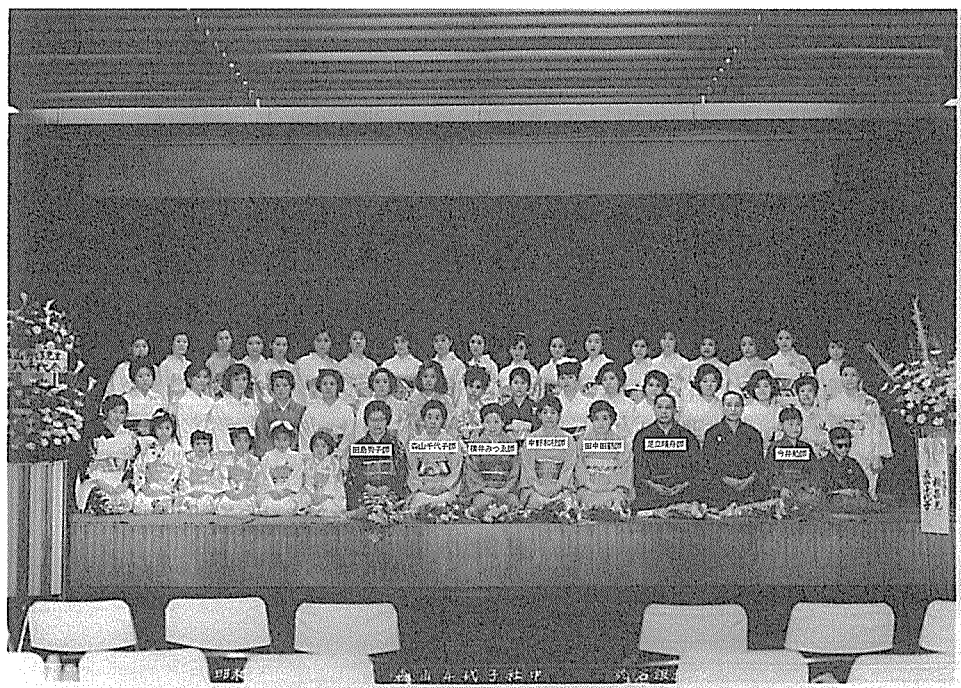


写真8 名銀ホールにおける森山師社中会記念写真

康子氏の師匠で横井師の弟子である。古市氏のお話によれば昭和23年前後から昭和36年頃まで名古屋市千種区谷口で教授をされていたそうである。

写真6は「娘道成寺」の演奏風景である。森山師の社中の演奏（おそらく温習会）で森山師が後見をしている。西園流尺八宗家岩田西園師の御教示によると、「尺八は西園流以外の流儀の演奏者である。氏名は分からないが、洋楽の楽譜見台を使用するのは都山流系なのでその関係者であろう。戦後復興期の行儀のよいさらえ会（＝温習会）の雰囲気がよく出ている。場所は松岡旅館の大座敷である。」とのことだった。

写真7は三人の子どもが琴を演奏し、森山師が後見をしている。尺八は岩田西園師によると「西園流の足立晴舟師である」とのことである。

写真8は名銀ホールにおける森山師社中会の集合写真である。写真に写っている田中田鶴（子）師は小松景和師の娘の池田くわ師の弟子であり、その後三品正保師門下に移り、さらに横井師の元に転門した。また中野和枝師は横井師の内弟子である。森山師が横井師と横井師の育成した弟子の師匠達と懇意であったことが伺われる。また写真7に写っていた足立晴舟師、現在の国風音楽会会長であり日本で唯一の盲人平曲演奏家である今井検校勉師も写っている。

まとめ

「古典芸能」は戦前の日本放送協会（NHK）が作った用語であり、「伝統芸能」も戦後になって放送用語から作られた新しい言葉である。ラジオ放送が始まる以前、能楽は有閑階

級の旦那衆の芸であり、箏曲は裕福な家庭の婦女子が多く習い、清元や新内は花柳界の、落語や浪花節や浄瑠璃は下町の寄席に出入りする肉体労働者の芸だった。そして謡曲や箏曲は特に特定の師匠について稽古する愛好者によって支えられていた。戦後の昭和期になると能楽も箏曲も余暇に稽古を楽しむ専業主婦、女子学生、児童、会社員、公務員などの謡曲・箏曲サークルによって支えられるようになった。演劇として能を観る観客、音楽として箏曲を聴く聴衆が育つのは平成に入ってからである。現在、能楽・箏曲・長唄・日本舞踊など古典芸能に属するジャンルはいずれも稽古に励む愛好者の高齢化が進んでおり、温習会などの「素人の発表会」に参加してくれる次世代の育成が大きな課題となっている。

稽古を通じて師匠やその芸に触れる機会の多かった昭和期までの愛好者達は、本論文で紹介したような「古典芸能の実態」を表す写真や録音を、師匠に劣らぬほど多く所持している。しかし「はじめに」に記した通りそれらは個人的なものであるため、代が変わると散逸したり、価値が分からないままに廃棄されてしまう危険性が高い。これからも早急に収集を進めたいと考えている。

注 飯塚恵理人「戦前から昭和四十年代までの東濃地方での宝生流謡曲の流行について—中津宝生会の記録と写真を中心に—」、宝生会「宝生」第36号 花に逢う、平成27年9月発行、P. 23-25

補記 貴重な資料を御提供頂きました中津川桂会梅田嵯峨氏と箏曲芳糸会（岡崎清芳師社

中)の古市康子氏、御教示を頂きました西園流尺八宗家岩田西園師に感謝致します。

本稿は平成28年度椋山女学園大学人間学プロジェクト研究「日本・アジア文化と人間」と、平成28年度科学研究費助成基盤研究(C)「東海地域近世・近代能楽資料の収集・整理

とアーカイブ化」(研究代表者:飯塚恵理人、課題番号:26370216)、平成26年度放送文化基金助成「昭和20-40年代民放草創期放送資料の収集・整理とアーカイブ化に関する基礎的研究」(研究代表者:飯塚恵理人)による成果の一部となります。